

# 在村医家の日記に見る幕末期の地域医療 —『本田覚庵日記』を中心に —

2025年10月18日（土）

於：武田科学振興財団杏雨書屋

山梨大学非常勤講師 長田 直子

<本日の講演内容>

はじめに

1. 本田家について（『本田覚庵日記』を読む前提として）

（1）本田家の紹介/（2）江戸時代の本田家/

（3）江戸時代の本田家を知るためのキーワード（特に9代随庵～）

2. 『本田覚庵日記』の作者、本田覚庵と日記

（1）本田家第11代当主、本田覚庵/（2）覚庵の日記類（現存するもの）

3. 『本田覚庵日記』からみる幕末期の地域医療 一周辺資料と合わせて

（1）『本田覚庵日記』（『覚庵日記』冒頭）/覚庵の文人としての活動/

（2）本田家の医療活動 ①診療環境の整備/②薬種の調達/③弟子の養成と弟子達の活動/  
④本田家の患者たち

おわりに—幕末期の在村医・地域医療とは

国立市について

1. 本田家について

（1）本田家の紹介

本田家—江戸時代、下谷保村（現、東京都国立市谷保）で村役人・医家・文人として活動

⇒明治時代以降本田家本家は、戸長・文人として活躍

国立市の歴史を語る家

H28年、本田家第16代当主（故本田咲夫氏）により、

旧本田家住宅主屋（享保16年の棟札あり）、表門（幕末期）と付随する土地、

書籍・文書類、篆刻等、約7万点の資料が国立市へ寄贈

・主屋・表門 東京都指定有形文化財（建造物）に指定。現在部材を活かして再建中

・書画・篆刻等のモノ資料の一部—国立市登録有形文化財

・文書—調査後、整理中—国立市登録有形文化財（古文書）

※博物館展示も開催され、今後、医家の面・文人の面等明らかになってゆく段階

## (2) 江戸時代の本田家

遠祖一畠山重忠の家臣カ（鎌倉時代）？

初代は、上毛白井の本田太郎次郎定経（天正年間没）

江戸時代、名主・医家・文人として活躍したのは9代目定綏（隨庵、1761～1834）

～11代目 定済（覚庵、1814～1865）の時代

\*近代一本田家本家は、戸長、売薬製造販売（黒龍散など）、文人に。

## (3) 江戸時代の本田家を知るためのキーワード（特に9代隨庵～）

・下谷保村の村役人（寛政5年、1793には名主役）=農民 孫三郎

・文化人 大觀堂（隨庵の号）・大觀書屋

・医家 大觀堂（専門は産科・婦人科）

例：江戸の産科医片倉鶴陵→本田孫三郎（隨庵 or 昂斎カ）宛書簡（年次12月13日）

※下谷保村内・村外の多摩地域の人々、江戸の人々（医家・文人）とも、広汎な交流を持つ家⇒覚庵の活動のベースとなる

### <本田家の医学関係蔵書>

医学関係蔵書（版本・写本）—290点以上（現在再確認中）

（『本田定弘家所蔵書籍目録』、くにたち中央図書館 1988.3 より）

・漢方医学書/蘭方医学書/本草学書/鍼灸書/馬医書

※漢方医書を中心としつつ、江戸時代の医学書まんべんなくあり

医学関係蔵書を元に、本田家の人々が作成した抄録もあり

## 2. 『本田覚庵日記』の作者、本田覚庵と日記

### (1) 本田家第11代目当主 本田覚庵 ※覚庵は、医家・文人としての号

本田孫三郎 定済（さだなり） 文化11年～元治2年（1814～1865）

本田家分家→本田家の本家へ養子入り

下谷保村名主、医師、文化人（書家・漢詩等）として活動

### (2) 覚庵の日記類（現存するもの）

『筆記』 — 天保3年（1832）6月～12月、江戸での修業中の日記 覚庵19歳

『覚庵日記』 — 万延元年（=安政7、1860）2月～文久2年（1862）12月 47歳～49歳

『癸亥日記』 — 文久3年（1863）正月～12月

特徴：いずれも、医療関係のみを記した日記ではなく、多様な内容

短文かつ簡潔（日記のみからではわからない部分も多々あり）

### ＜本田覚庵の修業時代（江戸での修行）『筆記』から＞

- ・修業先 ⇒ 江戸麹町の賀川流産科医、安富家（安富文忠・文行）、本田家の親戚
- ・修行内容—① 読書・写本・医師の仲間との輪読/② 薬種の製剤・調合/③ 障子張りの手伝い、調合場の掃除/④ 診察（但しメインではない）/⑤ 賀川流産科医との交流/⑥ 文化的教養をつける ⇒ 修行先での医業・文化的修行が、帰郷後の活動に反映。

### 3. 『本田覚庵日記』からみる幕末期の地域医療 — 周辺資料と合わせて

#### （1）万延元年（1860）2月 日記の冒頭

朔日 夕方雨、儒生栗斎泊り、少々認ものいたし候、四ツや中信屋お浦久々にて年詞ニ参り候、高安臥龍年詞ニ来ル、蕎麦こしらへ出ス、江連量平年詞ニ来ル、石坂内有之来ルに付、樅園賀筵徘徊（俳諧）連へちらし之相談、其外種々賀筵談ニ及候、深更ニ帰ル  
※高安臥龍—国立市東隣の府中宿（府中市）の寺院の僧。

樅園一府中六所宮の神官。国学者。

ともに、日常的に本田家と漢詩・俳諧等文化的交流あり。

四日 晴風、たゞみや来る、奥八畳調合場、才二分梅へ便、たゞみ表并油式朱之使ニ行、  
夕方四ツや平六急病、為吉代診、昼前石田歳藏（土方歳三）来ル、為吉夜半ニ帰ル、弘二郎  
起ル、青梅良介小児連来ル、熊タン（熊胆）壱朱買  
※石田歳藏—土方歳三。国立市近隣の石田村（現日野市）の農民。本田家の親戚。  
為吉一本多雖軒。本田覚庵の弟子。

※日記には、日々、文人・近隣の人・親戚・職人・患者、幕府関係の役人（代官の手代・御出役）・宗教者（大山御師等）・江戸からの来訪者（医師・薬種商・筆屋など）・按摩・漫遊家・遊歴の者…、多様な人々が本田家を訪れ、時には宿泊。本田家が小遣いを渡すことも…。

＜覚庵の文人としての活動＞—米庵流書家として祭礼時の幟の揮毫依頼も頻繁（小川新田等）

#### （2）本田家の医療活動

##### ① 診療環境の整備

- ・新しい調合所の整備（畳替え・縁側）—「たゞみや来ル、奥八畳外調合場」（万延元、2月4日～5日）/「調合場縁側源大外壱人来ル」（万延元、2月6日）
- ・道具の購入・貸出（百味簞笥・薬籠・算盤・外科道具・蒸露罐）—「百味簞笥四軒〔虫損〕箱屋持來（万延元、6月23日）/「表具屋より薬籠出来到ル」（万延2、7月6日）/「六匁にて算盤一求メ」（万延元、3月27日）/「トチギ外科道具や鉄砲玉抜壱本、調合所連中品々相求候」（万延元、3月12日）/「高安寺より蒸露館（蘭引）帰る、アルコル一升」（万延2、7月6日）

- ・書物の管理（蔵書の虫干し）「蔵書虫干始ル」（万延元、6月6日）
- ・薬種の仕入れ（表）一鰯屋由兵衛・会津叶屋弥右衛門・いわしや（鰯屋）・淀橋いわし屋・寺方村・府中半夏老人・吉村・常久（村）  
文久3年以降一鰯町三丁目平川丁貝坂いわし屋太兵衛・新宿三河や  
※この時期、本田家では、新しい調合所の整備を行っている。必要な道具も適宜購入（時には貸し出す）、書物を管理し、薬種を頻繁に調達

## ② 薬種の調達

本田家の薬種の調達先として、複数の店・人が登場。なかでも、鰯屋（いわしや）は、ほぼ毎月本田家を訪れる。（表）

江戸の薬種商、鰯屋（いわしや）—『江戸名所図会』にも描かれる本町薬種店。

※「鰯屋」号の店は、本町のみならず江戸内に複数あり。

本田家の主な薬種調達先は、主に鰯屋（おそらく淀橋の鰯屋由兵衛）

甲州道中に近く、下谷保村へは一日で行ける距離 約24Km

鰯屋は、ほぼ毎月江戸から本田家を訪れ（江戸の縁）、本田家に一泊～数泊（表参照）。

逗留中は、本田家を拠点に近隣村へも赴く

万延元年7月17日～18日

十七日 晴又雨、早朝覚庵押立へ行、卯斎内藤へ行、為吉立川辺へ代診、東郷帰宅、いわしや来一泊

十八日 いわしや川向へ行、通々高廿八両余有之候、内金十七両渡

万延2年6月16日～18日

十六日 晴陰 いわしや来一泊、酒宴ヲ催ス

十七日 晴 いわしや南方へ行、夕刻帰ル、香魚壱賀ご（一籠）持参、又一泊

十八日 いわしや帰ル

いわしや由兵衛→本田家への金銭借用（万延元年5月14日～15日）

夕刻いわしや由兵衛来ル一泊（14日）/式両也いわし由兵衛へ渡（15日）

日記の該当部分に、15日の「覚」の挟み込みあり

本田家の頻繁な薬種の調達=相当の医療活動をしていたと思われる

名主・文人としても忙しい覚庵、診療活動を支えた人は？ ⇒弟子たちの存在

・本多雖軒（国分寺村名主本多家四男、～万延2年2月まで、10年くらい覚庵の元で修業）

・青木省庵（相原村=町田市医家、本田家の親戚）

・福田卯斎（茨城県土浦市医家の息子）

ほかに、佐東静造・敬斎（五十子敬斎カ）・玄順（八王子恩方桑原玄順カ）・賢斎・文後・文得・文吉・弘斎・周精・与吉など。時期により弟子は替わる。

※とりわけ、万延元年～2年にかけて、雖軒・省庵・卯斎が医療面で大活躍する

### ③ 弟子の養成と弟子たちの活動

#### ・本田家の弟子の養成—弟子たちの修業

##### 〈医療活動に関する修行〉

・塾中総出で庭掃除/診療（覚庵の補佐・代診）/地域の医家への使い/薬の製造

##### 〈文化的修業〉

・八王子の文人方へ訪れる/本屋へ行く

##### 〈月俸料の記載〉

弟子達は、月俸料を支払い、本田家に住込みで修業。覚庵の江戸での修行時と同様、

弟子達にとって、本田家での修行は医学技術の習得のみならず、文化的な素養を積み、人とのつながりを作る場でもあった。但し、日記中弟子達のメインの修業は、「診療活動」

※診療は、基本的に往診。弟子達は、日々谷保村周辺から他村まで、診療に赴く。

時には、二人で診療で赴くことも。（診療は、本田家専門の産科のみならず）

万延元年 6月第 8 日

陰天難晴、石田年蔵来ル、坂下宗五郎乗醉来、卯斎小のじへ行、為吉上谷保清七内難産ニ付代診。

8月第 10

為吉中藤定右衛門カ小川へ廻勤、夜半帰宅、中藤定右衛門へ瀉水術ヲ施ス、妙々奇談有り、卯斎府中へ行、小川杏斎方カ人カ人カ為吉同道來一泊、江庵府中へ行、吉村より茯苓五百目昨来ル

閏3月 12 日

晴、石神作右衛門江戸行に行、色紙、短冊代金式分程たのむ、和介来る、江戸行申談、

為吉・卯斎両人カて国分寺疵人有之行、省庵染谷迄使、活法一巻、菱湖法帖一本右脩斎へ貸置候を受取来る、外に史記十巻借来る、覚庵田堀りより榎戸迄行

※弟子にとって学び・人的つながりを得る機会。本田家の診療活動を支える存在でもある。

退塾後の弟子達は各々開業・実家を継ぎ、明治時代まで医家として活動

### 万延元年 2月～2年、3人の弟子達のおおよその診療・行動範囲

診療・行動範囲は村内にとどまらず、広範囲。3人の弟子のうち、診療の外出が最も多いのは、為吉。本田家での修行は約10年。この時期は最後の1年間（万延2年2月退塾→慶應年間に府中で開業）⇒ 弟子達は、修行&師匠の診療活動も支える。

#### ④ 本田家の患者たち 一どのような人たちが医療を受けられたのか？一

日記には、様々なタイプの患者が見える。

- ・御普請奉行—「御普請奉行腫物出来候故弥左衛門案内にて来る」（万延元、3月9日）
- ・日頃交流する他村の名主や医家—「田無<sup>カ</sup>半兵衛病氣二付小金井貞安書状ヲ持頬ニ来ル」・  
「覚庵田無半兵衛<sup>カ</sup>布田小島たはこや迄行、夜ニ入帰ル」・「早朝<sup>カ</sup>覚庵田無半兵衛方へ行、  
玄順方へ立寄、吐産五拾疋折一つ」（万延元、6月29日～7月3日）

※田無半兵衛—田無村（西東京市）名主、本田家と日頃交流有。この後、半兵衛は没する。

玄順—おそらく、田無村の医師（遊歴の医師で、田無村に定住した賀陽玄節の息子玄順カ

- ・文化人として交流のある家—「為吉猿渡迄代診、夜半ニ帰宅」（万延元年閏3月29日）
- ※猿渡家—府中六所宮神官・国学者・漢詩人

#### 医療費—高額な場合

- ・小野路文右衛門不快に付見舞申来る、壱両也、卯斎<sup>カ</sup>預ケ」（万延元、4月7日）

※翌8日に覚庵が小野路へ行き、夕刻に帰る

#### 限られた人のみ診療を受けられたのか？⇒実際には、村役人レベル以外の農民は多い。

- ・百疋下河原金蔵薬礼」（万延元、3月29日）／「百五拾疋大丸大兵衛礼、松魚壱疋辻万屋<sup>カ</sup>、  
又あじ壱籠ちうし力蔵<sup>カ</sup>」（同6月26日）／「河内徳二郎式朱礼、あゆ一枚」（同7月2日）／  
一朱礼彦四郎、三分也礼鎧水新次郎・壱分也礼村与四郎・壱分立川あら屋敷林蔵（7月4日）

※薬礼は、高額～物納まで。診療報酬の制度のない時代。多様なレベルの患者を診療。

参考：本田家の診療記録 例：嘉永3年の「活人録」

#### 何故、多様なレベルの患者たちが診療を受けられたのか？

近世中後期～幕末期の村一医師を必要とする時代/村役人など村のリーダー「地域の人々を  
守る」役割を担う/村の医家—基本的に村役人クラスなどの「農民（百姓）」が医家を兼業。

※本田家一名主・文人・医家 →村内のみならず周辺村の人でも、困っている人を助ける。

（参考）嘉永2年の「容体書」（控）—「名主ニ而医師」の記載。

#### おわりに

##### 幕末期の地域医療

- ・地域医療の担い手—村役人クラスの農民・文化人が医家を兼業
- ・在村医家—診療活動+次世代の在村医療の担い手（弟子）も教育・養成。弟子達は、学び・  
人々との交流を深める。医家の診療活動を支える存在ともなる。
- ・医療を受ける人々—村内外、広範囲。多様な階層→上層農民以外の農民も医療享受の時代に  
→大都市の「医業を専業とする医師」の医療とは異なる在村医家・地域医療の姿が窺える。

表 『本田覚庵日記』(万延元年～文久2年) 中の本田家の薬種・医療道具等調達・貸出先

調達先(貸出先)	年	月日	内 容(概要)
トチギ外科道具や	万延元(庚申)	3/12	鉄砲玉抜壱本、調合場連中品々を求める
鰯屋由兵衛	〃	閏3/15～17	来る、泊り→逗留→早朝帰る
いわしや	〃	閏3/27	荷物到着、少々違い申し候
会津叶屋弥右衛門	〃	閏3/28	熊胆代630文払、めがね求
いわしや	〃	4/28(～29)	夕刻来る、一泊
いわしや由兵衛	〃	5/14～15	夕刻来る一泊→2両也いわしや由兵衛へ渡す
いわしや	〃	6/7	荷物出致す、朔日出す延引き
いわしや	〃	6/18～6/19	夕刻一泊→早朝に帰る、小川の使いがいわしやの書状を持ってくる
(箱屋)	〃	6/23	百味簞笥4軒〔虫損〕箱屋持ち来る
(不明)	〃	7/12	200文麻黄2貫目仕入
いわしや	〃	7/17～7/18	来一泊→いわしや川向へ行、通々28両余有之、内17両渡す
淀橋いわし屋	〃	8/5～8/6	才二郎いわしやへ使いに遣わす、八味丸米并染物 注文に遣わす→夕刻才次朗淀橋より返書来る、八味丸来る
吉村	〃	8/10	茯苓500目昨来ル
いわしや	〃	9/1～9/2	来一泊、いわしや5両渡す
いわしや	〃	10/11～10/13	夕刻来る→滞留→3分1朱5分いわしやへ渡す、今朝帰る
寺方村	〃	10/19	半夏9百匁代料1分2朱払
いわしや	〃	11/20	一泊
いわしや	〃	12/15(～16)	来一泊
いわしや	〃	12/26	15日注文のものが田中屋方着
いわしや	万延2 (文久元年)	1/8～1/9	来一泊→今朝帰る
いわしや	〃	2/16～2/18	来一泊→滞留→今朝帰る
いわしや	〃	2/28	いわしやより注文並びに書状が来る
いわしや	〃	3/15～19	寿庵(常陸國土浦の弟子の父で医師)いわしや 同道来→覚庵いわしや寿庵屋敷分へ行、いわし や一泊→いわしや南方へ行→いわしや一泊
いわしや	〃	4/13～15	来一泊→一泊→出立

いわしや	〃	5/16~17	来一泊、いわしや府中へ行→いわしや薬種箱そ げ色々求同人帰る
府中半夏老人	〃	6/13	半夏 2 升売金 1 分遣す
いわしや	〃	6/14	鰯屋へ注文出す
いわしや	〃	6/16~18	来る一泊、酒宴を催す→いわしや南方へ行夕刻 帰る、香魚壱賀ご（一籠）持参、又一泊→帰る
口戸老人	〃	6/23	半夏 3 升買 9 百目也、代 1 分 2 朱遣す
いわしや	〃	6/24	いわしやより薬種箱、色紙短冊来
常久	〃	6/29	常久より麻黄茎到来、正味 7 貫×200 目也
高安寺	〃	7/4	高安寺より蒸露館（罐）帰る、アルコル 1 升
表具屋	〃	7/6	表具屋より薬籠出来致る
いわしや	〃	7/16~7/17	来一泊→帰る
いわしや	〃	8/7~8	荷物届く、然る処〔蜜カ〕壱品が不着につき卯 死斎書状持参、東神山へ行ったところ未着故、 いわしやへ書面を遣す→いわしや又々蜜催促書 状遣す
いわしや	〃	8/12~8/13	来一泊→いわしやが来た処、蜜無着に付府中へ 参る、由蔵より蜜到来
いわしや	〃	9/2 (~3)	来一泊
鰯屋	〃	10/8	来る
鰯屋(いわしや)	〃	10/29~11/4	来る一泊→一泊→一泊→帰る（4 日まで逗留）
いわしや	〃	12/22	いわしやへ銀 15 両遣す
いわしや（鰯屋）	文久 2	1/7~1/8	来る→帰る
いわしや	〃	1/10	来る
いわしや由兵衛	〃	3/19	昨夜（3/18）土うら福田寿庵いわしや由兵衛同 道にて来る、一泊
いわしや	〃	5/3~5/4	来る一泊→帰る
いわしや	〃	6/14(~15)	来る、一泊
いわしや	〃	7/17(~19)	来る、一泊
いわしや	〃	8/14(~15)	来る、一泊
いわしや	〃	8/29(~30)	夕刻来る、一泊
いわしや	〃	12/15~12/16	来る、一泊→滞留

※『覚庵日記』（万延元年～文久 2 年、国立市所蔵）より作成

貸し出しは、万延 2 年 7/4 高安寺への蒸露館（罐）の返却のみ。

＜本田家に関する主な参考文献＞

- ・『本田定弘家所蔵書籍目録』くにたち中央図書館、1988年
- ・『本田覚庵日記』くにたち中央図書館、1989年
- ・菅野則子『江戸の村医者』、新日本出版社、2003年
- ・『幕末から自由の権へ—本田家の人々が見た時代』（くにたち郷土文化館平成18年度秋季企画展図録）、（財）くにたち文化・スポーツ振興財団発行、2006年
- ・『村の明治医新一谷保の村医者本田家の軌跡』（くにたち郷土文化館平成27年度秋季企画展図録）、くにたち郷土文化館発行、2015年
- ・『本田家と江戸の文人たち』（くにたち郷土文化館平成三十年度秋季企画展図録）、くにたち郷土文化館発行、2018年
- ・『本田咲夫氏聞き取り報告』（くにたち郷土文化館叢書第一集）、くにたち郷土文化館発行、

2018年